組版今昔

府川充男 著

発行 大日本スクリーン製造株式会社

http://www.screen.co.jp/ga_product/sento/pro/index.html#sekai

次目◉昔今版組

古活字版――幕末　003

明治初――敗戦・焼跡闇市　082

戦後復興――今日　000

◎組版仕様
題字・見出し書体＝ヒラギノ行書 Std W4
題字サイズ＝200級、見出しサイズ＝44級

これから三回に分けて本邦古今の組版、書物を種々ご紹介する予定です。よろしくお付合いのほどを願います。

第一回は明治初年までを対象と致しまして、図書研究についての基本語彙の解説と普段あまりお目にかかれない本邦印刷史の基本資料のご紹介を中心に進めてまいりたいと存じます。

古活字版――幕末

基本語彙と整版、活字版

図書研究の世界には特有の術語が成立しています。術語であるが故に、甲であって乙ではないと、資料情況を明確に記述することが、これによって可能となります。

まず和本の判型。江戸本で一番普通の大きさのものは天地約十九センチ、左右約十三センチくらいで、この大きさのものを中本と呼びます。中本より一廻り大きい判型、天地約二十四センチ、左右十七センチ、これを半紙本と呼びます。この二つが一番多いんですけど、さらに中本より小さいもの、これを小本とか袖珍本と呼びます。また、半紙本よりも大きな本は美濃紙を二つ折りにしたもので、天地約二十七センチ、左右約十九センチ、この判型の本を大本や美濃本と呼びます。また横長の本を横本といいます。

和本の表紙に貼附され図書の題名を記した紙片、これを題簽と呼びます。中には大きくて絵の入っているものもあり、これを絵題簽と呼びます。明治期、石版印刷のカラー画像を表紙に配した本が多く作られましたが、これは絵題簽の嫡流であったと言えるかもしれません。

表紙をめくりますと、今日言うところの「表二」の箇所、多くは色紙に、書物のタイトル、蔵版者名、刊行年月などが印刷されています。この部分を見返しといいます。ちなみに図一の『かな手紙の文』の見返しは赤い紙に刷られています。また表紙をくるむ外袋が付けられることがありましたが、その外袋には見返しと同じ印刷が施されることが多かったと思われます。外袋付で残っている江戸本は稀です。

★図一　題簽の貼られた表紙（四頁）と見返し（五頁）。見返しには色紙をつかうことが多い。この場合は赤。『かな手紙の文』辰文館、大正四（一九一五）年六月。半紙本。図示の部分は整版。

上野静村撰
中村春堂書

手紙の文

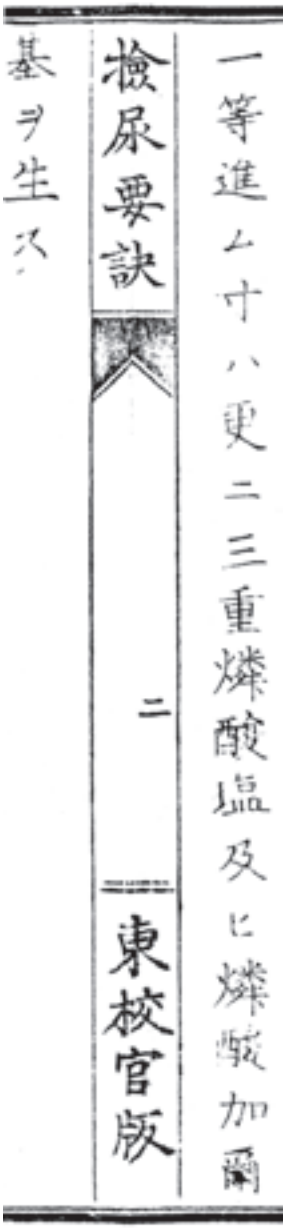
習字
雅用

東京
辰文館發行

通常の江戸本は片面摺りでそれを折曲げた袋綴じに四つ目の線装です。一枚の板木[★図一]に一丁分を彫刻したもの（板の表に一丁、裏にまた一丁を彫ることが多かったようです）を整版といいます。整版本は十数万標目が判明しておりますから、恐らく二十万近くの標目が摺られ、流通したものと考えられます。大抵の場合は山桜材と言われています。日本の、明治に至るまでの印刷物の大半はこの整版ということになります。享保七（一七二二）年、三都に出版条例が定まってからは整版の版木がどこにあるのかを書林仲間で統制していましたが、江戸期の正規の出版物の殆どは整版による印刷物でした。

丁の中心部分を版心[★図二]といいます。この版心にある魚の尾のような形をしたベタ、これを魚尾（ぎょび）といい、上下にある場合は上魚尾、下魚尾などと呼びます。花のような形をした魚尾は花魚尾と呼ばれます。ノンブルは丁付といいますが、左右中央に丁付がある場合と右に寄せてある場合があります。本を開いて左側に来る半丁を表またはオといい、右に来る半丁を裏またはウと呼びます。つまり「三オ」といえば第三丁表の略記です。また版面を囲む罫線を匡廓（きょうかく）といい、これが一本線なら単辺、二本線なら双辺、匡廓がない場合は無辺と呼びます。殆どの双辺の匡廓は内側の罫が細い子持罫状です。整版では匡廓の四隅に切れ目がありませんが、活字版の場合は匡廓も一辺ずつの組合わせとなりますので、四隅に切れ目が生じます。また行間が界線で区切られているものを有界、区切られていないものを無界と呼称します。嵯峨本は無辺無界です。

これに対して活字版は一字ずつの活字を組んで版面を構成したものです。本文ばかりでなくキリシタン版や駿河版の版心は幾つかの「部品」から成る活字版となっています。整版に対して、活字版は写本に準じた小規模出版という扱いで、書林仲間による自主規制の対象外でした。そのため表紙などに「活字版」と記しながら実際には整版で摺られている書物もあります。林子平の『海国兵談』は幕府の忌憚に触れて版木は没収されましたが、木活字版は何種類も出ています。整版と木活字版の両方を合わせて「木版」と言います。また、様々な活字版を総称して「活字版」といい、特に近代的な鋳造活字で組まれ



★図二「版木」……整版。頼山陽『山陽詩註』（明治二〔一八六九〕年）の版木。本文は有界。四周単辺。匡廓の上に頭註がある。

★図三『検尿要訣』の版心部。書名の下のベタ部分が魚尾で、木目がはっきりと見える。大学東校官版、明治四（一八七一）年十月。本文には島霞谷（しま・かこく）の製造した鋳造活字を使用した活版本。中本。

ているものだけを「活版」本といいます。木活字版を活版本ということは通常ありません。また乱れ版、乱版（らんばん）というものがあります。これは、丁によって活字版であったり整版になったりしている本です。

活字版というのは一本ずつ活字を入れています。そうしますと、活字の高さがちょっとずつ違うために圧が変わるので、一部分だけちょっと摺色が濃いとか薄いという状態が出やすい。戦前、ムラだけですぐ活字版だと言ってしまった時期がありますが、今の図書学、書誌学の資料批判のレヴェルではもう全然通用しません。というのは田舎版と呼ばれる整版本がかなりあるからです。京、大坂、江戸の三都で出される整版の商品には殆どムラはありませんが地方の印刷物にはムラが目立つことがよくあります。これは印刷に用いられる墨の調合に、三都で営業している印刷業者なりのノウハウがあったのだと言われています。それから、一字ずつ彫刻しているために文字が微妙に「曲がって」見えたり、ほんの僅かに廻転しているように見えることがあります。しかし今日の明朝体ベタ組組版になじんだ眼からすると字間を空けた楷書の整版に「曲がり」を感じてしまうという話はよくありますし、「曲がり」というのは、一旦その気になってしまうと少し曲がって感じたりしますので、あまり重点は置けません。被せ彫りの場合もオリジナルの「曲がり」は保存されます。また、先ず間違いない、というのが活字が顚倒しているケースで、ほぼ確実に活字版と分かります。

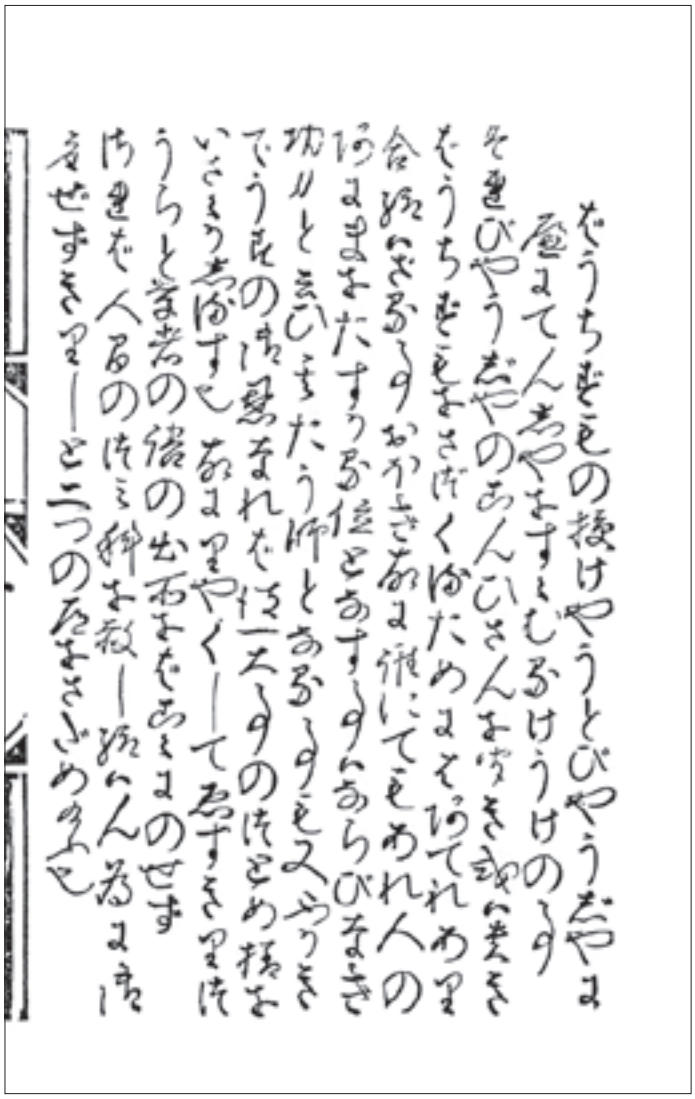
特に木活字版の場合に多いのですが、摺っているうちに、「ここは誤植だから直そう」とか「ここをちょっと直そう」と、活字を差し替えていき、場合によっては次の行まで異同が生じるケースがあります。これを「異植字版」と言います。異植字版というのは大変多くて、実は大抵の木活字版には異植字版が見つかります。また『学問のすゝめ』初版の題簽（★図四）も活字版で、書名の周囲を飾り罫で囲んでいるのですが、この囲み罫の花形活字にも二種類あるようです。なおこの花形は確実に金属活字だろうと思います。一方、「異版」という言葉がありますけれども、版自体が違っているのを異版や別版と言います。

★図四『学問のすゝめ』初版の題簽……周囲の花形を含めて活字版。

例えば元禄に出た本の版木を保管してあるとします。それを元治年間に出し直す時に奥付を変えたいということで、版木の一部を鋸で切りまして新しい刊行年月日の入った整版ブロックを埋め込んだりします。そういうふうに一寸であっても再版の時に何かいじってある本、これを「後修本」と言います。再版時に本の題名も変えてしまうのを「外題替え後修本」と言います。

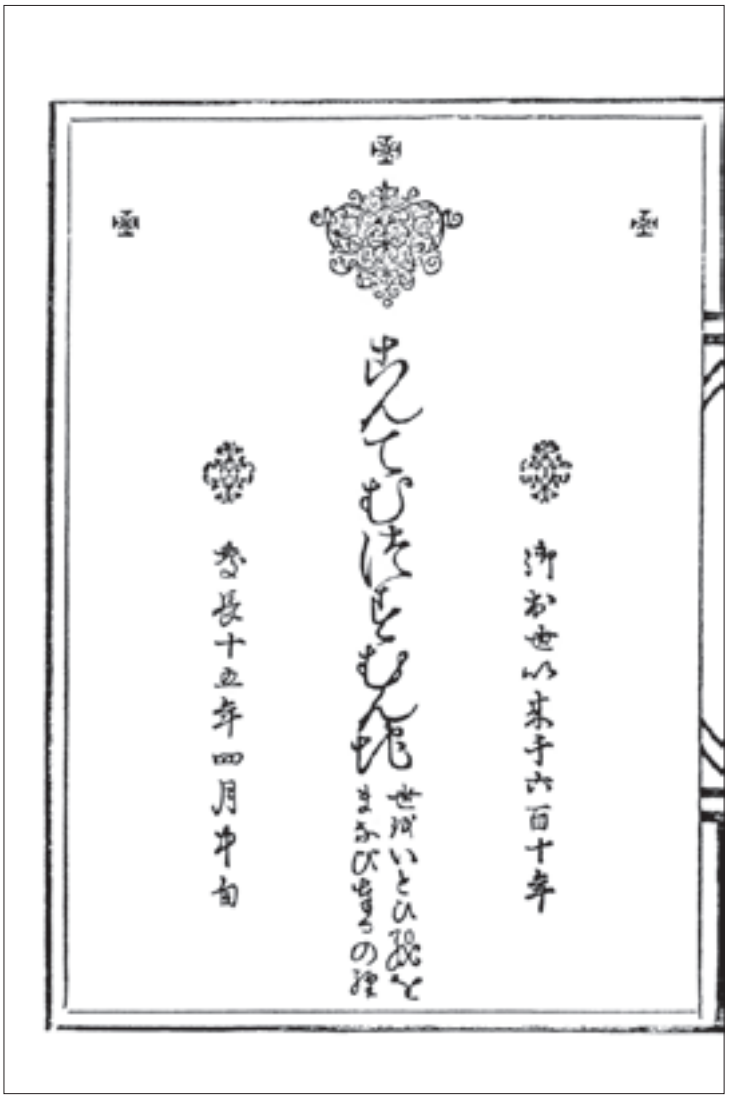
初版がオリジナルで、一番最初に出た本そのものです。「覆刻」とは基本的には被せ彫りを指します。被せ彫りというのはどういうことかというと、例えば整版なり活字版なりの印刷物それ自体を版下にします。それを裏返しにして版木に接着してそれで一枚板の整版を彫ってしまう。これを「おっかぶせ」あるいは「覆刻」と呼びます。それから、もう一つオフセットやコロタイプなどですけれども、稀覯本なんかのそれぞれのページの写真を撮ってそれを複製していく。これを影印本とも申しますが、この両者を合わせて覆刻と言います。つまり原型を保ったまま再刊することが覆刻です。では、原型と変わったらどうなるか。これを「飜刻」とか「飜印」と言うわけです。図書学の研究者ならば覆刻と飜刻をごっちゃにして「復刻」などという語を用いることはありません。福沢諭吉・小幡篤次郎の『学問のすゝめ』は初版の次に、おっかぶせによる整版本も出ました。こういうふうに、異版というのは何かとややこしいものです。

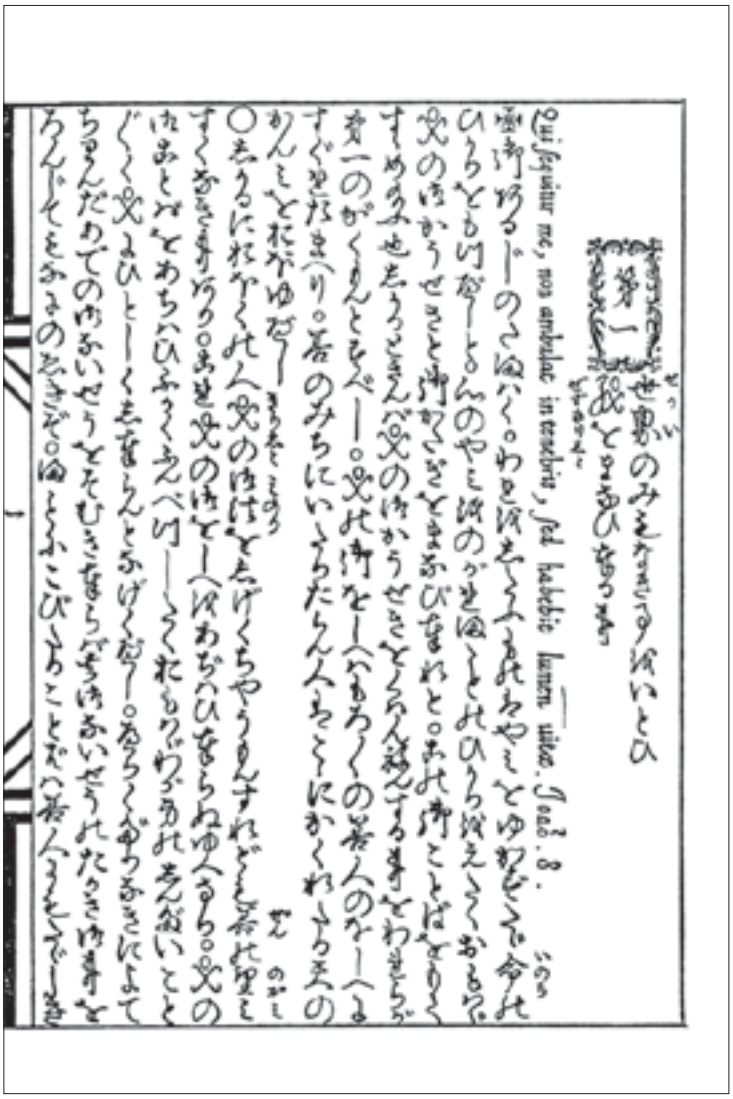
活字版は文禄・慶長から切れ目なしにずっと摺られ続けてきました、そのうち大体江戸時代の頭の半世紀ぐらい、慶安くらいまでの数百点を古活字版といい、混在期を経て、安永あたりからこちらのものを近世活字版といいます。近世活字版は千数百標目が知られています。古活字版の殆どは木活字版ですが、キリシタン版の多くや駿河版などには鋳造活字が用いられました。キリシタン版は天正遣欧使節の持帰った機材を用い、ヨーロッパ滞在中に印刷術を学んだコンスタン・ドゥラード（日本名不明）という人物が中心になって開版されたもので、西洋式の鋳造活字が用いられたと思われます。徳川家康が開版した駿河版に用いられた活字は銅製で、『大蔵一覧集』『群書治要』という大冊二標目に用いられました。駿河版銅活字は凸版印刷が所蔵する重要文化財です。朝鮮銅活字の影響という説もありますが、朝鮮活字のような板状の活字ではなく相当の高さを持つ活字の形状から、本邦ではむしろキリシタン版からの影響を考える意見の方が有力です。古活字版には書物美の頂点とも申すべき嵯峨本各種をはじめとして美しい本がいくつもあります。それら古活字版の組版相をご覧下さい。[★図五十七]



★図五　キリシタン版『ばうちずもの授けやう』一オ……文祿二（一五九三）年刊。鋳造活字版。天理大学附属天理図書館蔵。『天理図書館善本叢書　和書之部第三十八巻　きりしたん版集　一』（天理大学出版部〔八木書店発売〕、昭和51年5月）より引用。

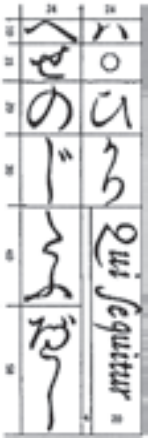
★図六　キリシタン版『ぎやどべかぞる』……慶長四（一五九九）年刊。和文標題紙。鋳造活字版。天理大学附属天理図書館蔵。『天理図書館善本叢書　和書之部第三十八巻　きりしたん版集　一』（天理大学出版部〔八木書店発売〕、昭和51年5月）より引用。





★図七　キリシタン版『こんてむつすむん地』……慶長十五（一六一〇）年刊。和文標題紙と一オおよび活字が顚倒している箇処。「こゝろぬるく」の「ゝ」が逆立ちしている。キリシタン版唯一の木活字版。

★佐藤敬之輔は『こんてむつすむん地』の木活字が天地十：十五：二十：三十：四十：五十の六種類の長さの木活字から構成されていると分析している。フールニエ・ポイントや鯨尺との比較表は参考にならないが、この倍数関係は確かであろう。図は『日本のタイポグラフィ』（紀伊国屋書店、昭和四十七〔一九七二〕年）より。「24」とはフールニエ・ポイントの二十四ポイントの意味。



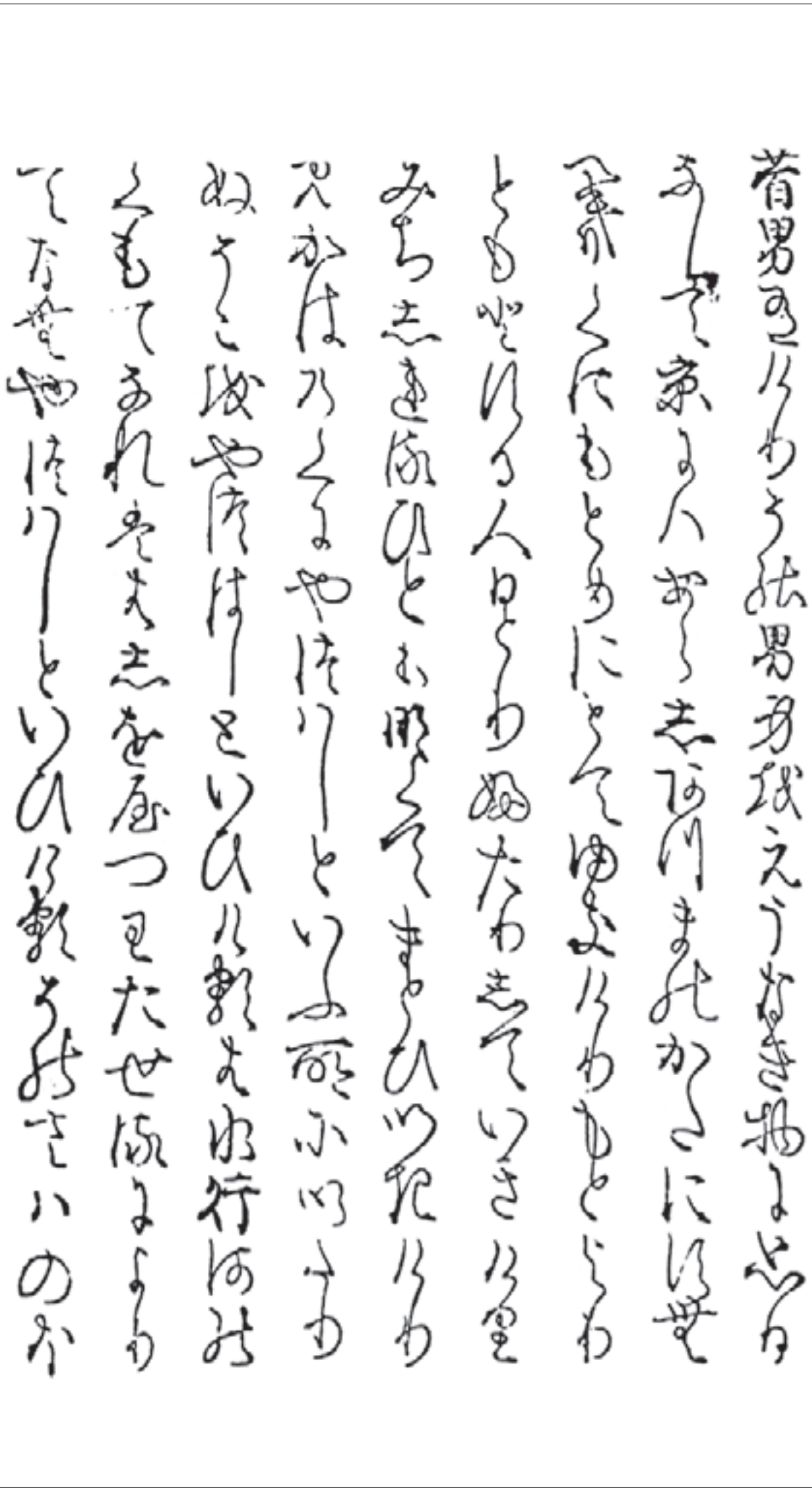
太平記卷第一

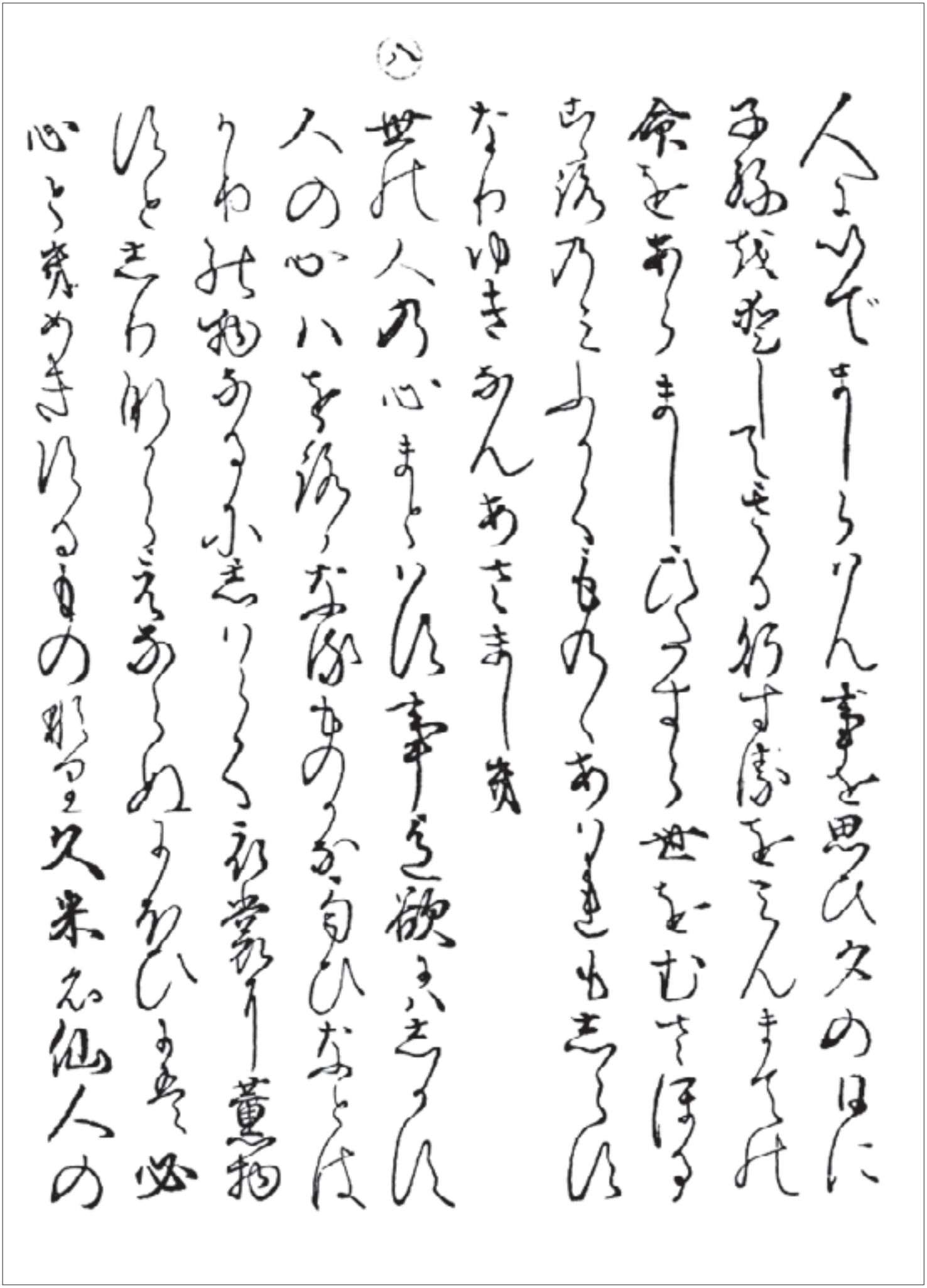
○後醍醐天皇御治世事付武家繁昌事

爰ニ本朝人皇ノ始神武天皇ヨリ九十五代ノ帝後醍醐天皇ノ御宇ニ當テ武臣相摸守平高時ト云者アリ此時上垂君之德下失臣之禮從是四海大ニ亂レテ一日モ未安狼煙翳大鯨波動地至今四十餘年一人而不得富春秋萬民無所措手足倩尋其濫觴者匪啻禍一朝一夕之故元暦年中ニ鎌倉ノ右大將頼朝鄕追討平家而有其功之時後白河院叡感之餘ニ被稱六十六箇國之總追捕使從是武家始テ諸國ニ守護ヲ立庄園ニ地頭ヲ置彼頼朝ノ長男左衛門督頼家次男右大臣實朝公相續テ皆征夷將

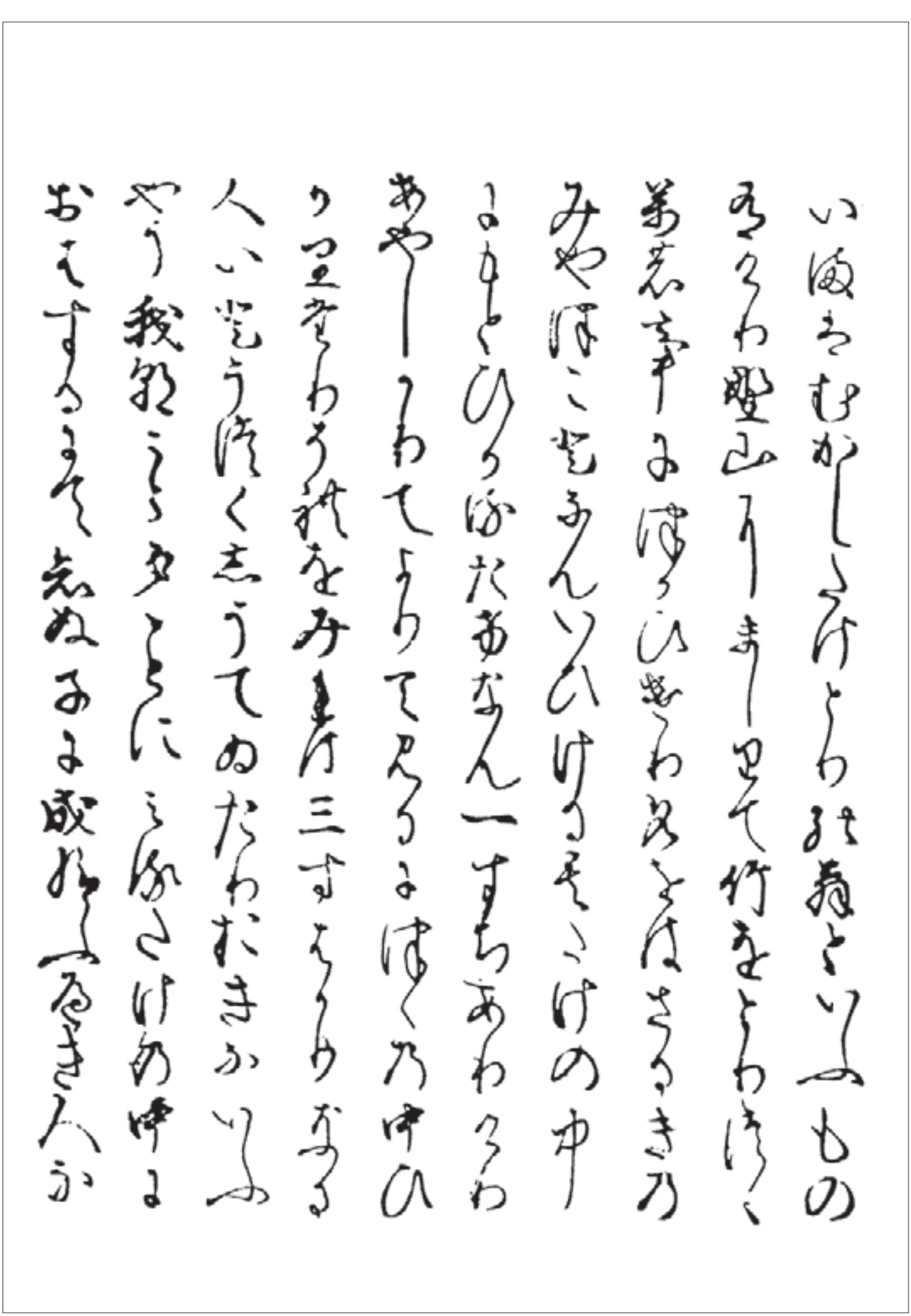
★図八『太平記』……慶長十二（一六〇七）年刊。大本。木活字版。

★図九　嵯峨本『伊勢物語』（一二～一三頁）……慶長十五（一六一〇）年刊。大本。木活字版。





★図一〇　嵯峨本『徒然草』……慶長年間。大本。木活字版。



★図一一〔竹取物語〕第一種本……慶長年間。大本。木活字版。

平家物語第一

祇園しやうしやのかねの事

祇園しやうしやのかねの聲諸行無常のひびきあり娑羅双樹の花の色しやうしやひつすいのことわりをあらはす驕人も久しからず唯春の夜の夢のごとし たけき者も遂にはほろびぬひとへに風の前の塵に同じ

遠い昔のせんせうをとゝらへ合へてうかうかんれいの物語

★図一二『平家物語』……中院通勝（なかのいん・みちかつ）が校正したことで中院本と呼ばれる。慶長刊。大本。木活字版。

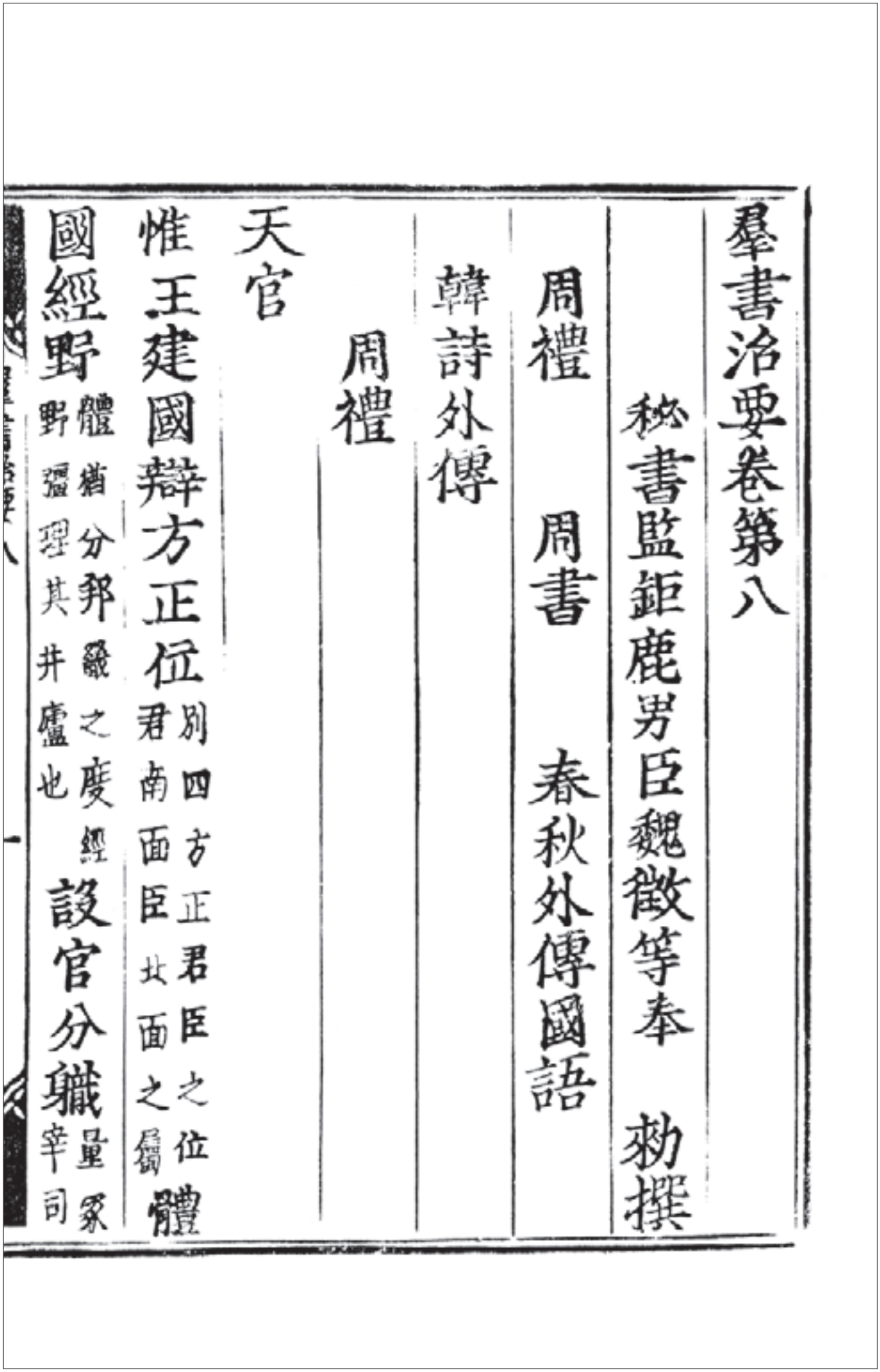
高砂

この類郡乃国より結度乃神や二度有大社や
[illegible]
藤原真国歌やんも旧友も皆昔より成て高
砂の松ともいもんとすまい長も友ま
ていまし後をたろ人ま世んとまり
いき乃去　続古今不や　生松
ひしをも　相生と書　は偽わり
不思議　キモヒハカラサルコトヲ云也
夫婦　キツトヲンナヽリ
山川萬里ヲ隔し共　ヤヽカハ万里ヲヘタツルナリ

★図一三〔謡抄〕第一冊『高砂』……守清刊。慶長年間。大本。木活字版。

欲逃歸云其外鎮西条々被申之又被所望乗馬云就此
申狀聊雖散御不審猶被下遣雜色定遠信方宗光等但
定遠信方者在京都可相具之旨被仰含于宗光々々帯
委細御書是於鎮西可有沙汰條々也其狀云
十一月十四日御書正月六日到来と日送光
勝力をゑこ志人つれ孤よ此孤力到来ゆ世たる
むゆ孫ゆ平篠崎の事おごり送ハさらんと
ようおもふ事ゆそゆへ物語しうそ
て給と國ゆ沙汰志給へ搖てくゆ乃方ゆ
ゆふくまれびておゆ寸べしゆの事孫
にさふべ事ゆそゆハのきとゆ家ハ者よ傾
搖うゆふゆそゆれハゆを乃ゆうゆ

★図一四『新刊吾妻鏡』巻四の一ウ……慶長・元和年間。上下花魚尾。上下小黒口。大本。木活字版。



羣書治要卷第八

秘書監鉅鹿男臣魏徵等奉　勑撰

周禮　周書　春秋外傳國語

韓詩外傳

周禮

天官

惟王建國辯方正位別四方正君臣之位體君南面臣北面之爲體

國經野體猶分邦畿之度經野猶理其井廬也設官分職量冢宰司

★図一五　駿河版『羣書治要』巻八の一オ（一九頁）と一ウ（二〇頁）……（唐）魏徵等奉勅編。題簽題「群書治要」、内題「羣書治要」、版心題は「群書治要」または「羣書治要」（四字一組の連続活字と思われるが「羣書治要」には二タイプ、「群書治要」は少なくとも七タイプあるようだ。花魚尾も数種類以上。二桁乃至三桁という少部数の出版事業であるにもかかわらず何故こういう版相となっているのか未詳）。上下花魚尾。元和二（一六一六）年。大本。鋳造活字版。

徒宗伯司馬司寇司空各有所職而百官事舉以爲民極極中也合天下之人各得其中不失其所也乃立天官冢宰使帥其屬而掌其邦治以佐王均邦國掌王也邦治王所以治邦國者佐猶助也建邦之六典以佐王治邦國一曰治典以經邦國以治官府以紀萬民二曰教典以安邦國以教官府以擾萬民三曰禮典以和邦國以統百官以諧萬民四曰政典以平邦國以正百官以均萬民五曰刑典詰邦國以刑百

類字名所和歌集第一　サ一　代集抜書　伊行

石蔵　山野　山城

拾遺神楽　読人不知

同　大中臣能宣

新勅撰賀　藤中納言頼資

新後拾遺秋上　民部卿為兼

稲荷　山社　神祠　同

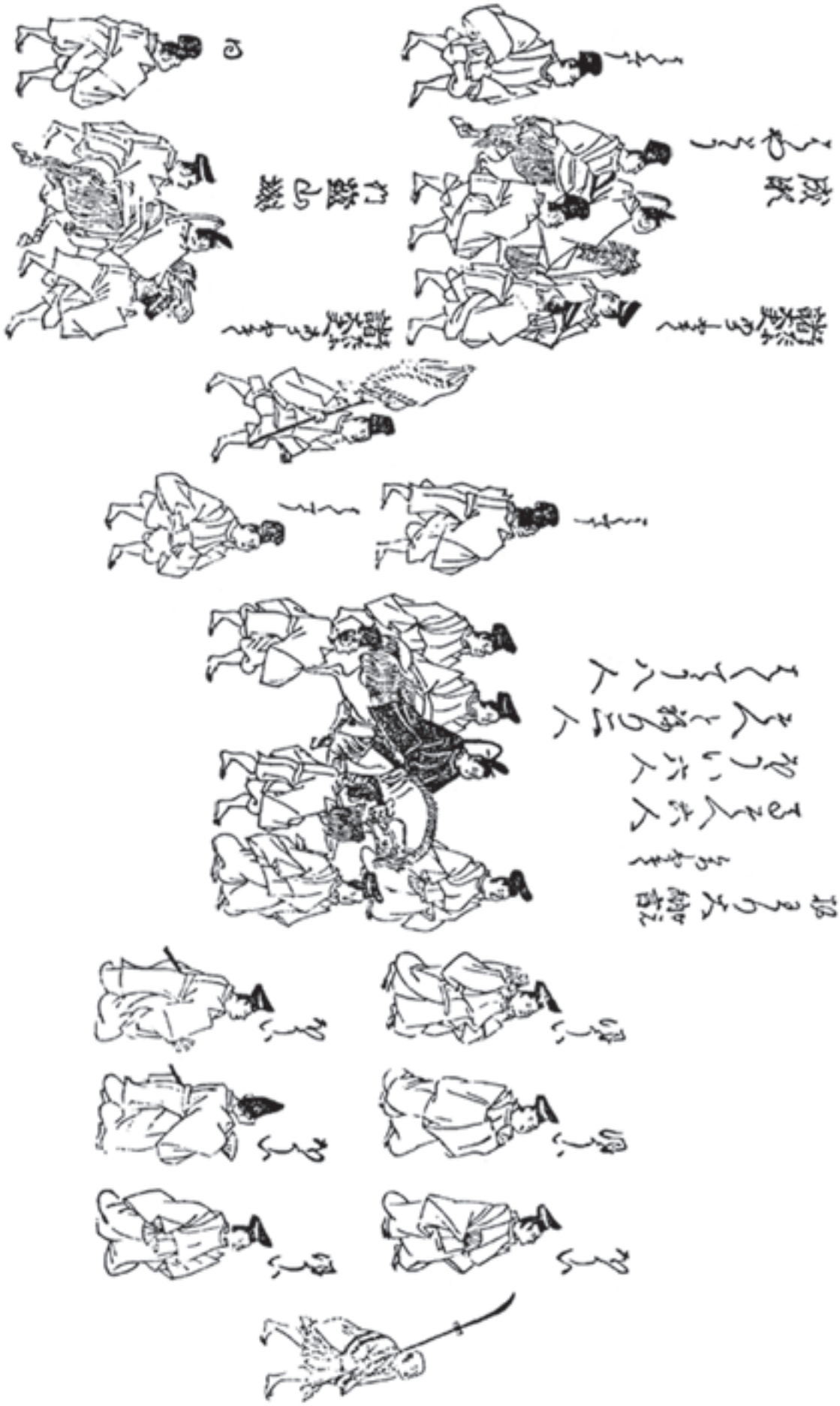
拾遺雑恋　平定文

同　菅原長能

後拾遺　読人不知

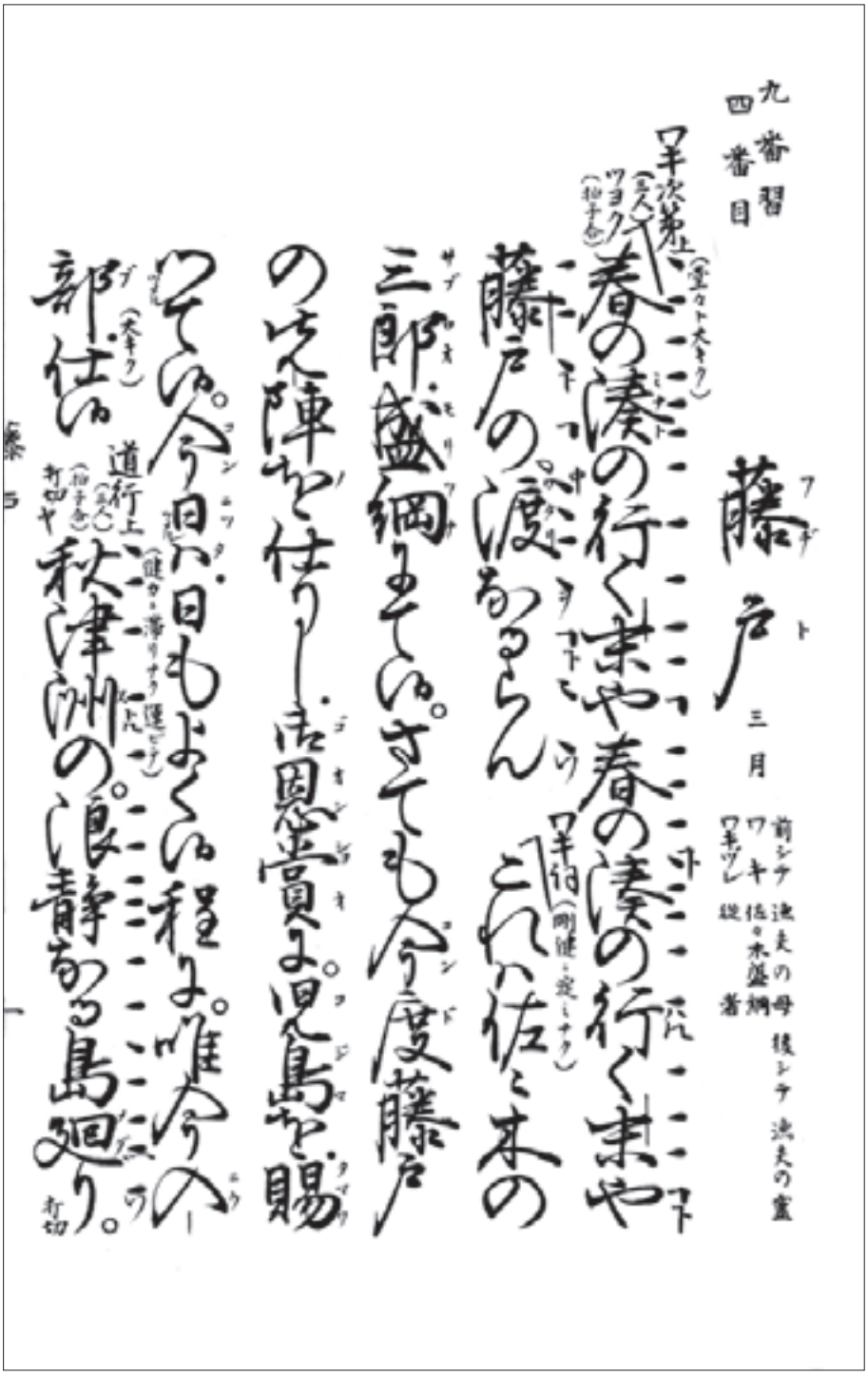
恵慶法師

★図一六『類字名所和歌集』……里村昌琢編。元和三（一六一七）年刊。大本。木活字版。



★図一七『寛永行幸記』の絵巻物……巻子本（かんすぼん）。寛永三（一六二六）年ころ成立。人物などの絵もすべて木活字である。

漢文は楷書（＋片仮名）、物語などは草書＋平仮名という具合に書物の性格、記事の性格により用いられる文字自体が劃然と分たれていたことがお分りになろうかと思います。〔謡抄〕第一冊『高砂』では謡の部分は草書＋平仮名、説明部分は楷書＋片仮名となっていますね。『新刊吾妻鏡』でも書簡・和歌などが草書＋平仮名となっています。このように嘗ては書体は書物や記事のジャンルに直結していたわけです。そうした意識は活版本が一般化した明治以降にも引継がれ、謡本や浄瑠璃本のように、結局活版印刷になじまなかったジャンルもあります。★図一八



★図一八　観世流改訂謡本『藤戸』……四つ目の線装、袋綴じに整版。観世流改訂本刊行会、昭和十二（一九三七）年二月。